



# 医学・看護学教育通信

第3号  
発行 2007.1.14

佐賀大学医学部 教育広報部会

ごあいさつ

2007 年第1回の「医学・看護学通信」をお送りします。本通信は、本学の教育に関する議論を活性化するために、積極的な情報提供を行ってまいります。本年もどうぞよろしくお願いいたします。



Advanced OSCE 結果を受けて

去る 11 月 29 日、12 月 6 日の二日間で実施された、Advanced OSCE(部会長:酒見隆信教授、実施責任者:吉田和代助手)の結果が 12 月 28 日に公示されました。

今回の結果では、模擬患者(SP)ステーションにおける学生のパフォーマンスが 4 年次と比較して成長しているのに対し、スキルラボ(SL)ステーションの成績が概して悪いという傾向がありました。

SL ステーションは、シミュレーター(呼吸音/心音)、検査(胸部 X 線写真/心電図)の 2 課題で構成されていましたが、心電図に関する課題の正解率がきわめて低く、教科書上の知識と実際の臨床技能としての心電図判読との解離が示唆されました。

そのため学生には、心電図読解に関する課題提出を全員に課し、来年度の病棟実習内容の変更にも反映される予定です。心電図、胸部 X 線写真だけでなく、基本的臨床検査の学習・訓練が充分行われているかの再評価・検討が必要と考えます。

そのほか本年度は、試験(OSCE)そのものの方法的問題として、課題数の少なさによる試験の信頼性、日程を二分割したことによる受験条件や難易度の不公平など、改善を要する問題もありました。来年に向けて実施部会で検討していきたいと思えます。(吉田和代)

PBL の改善に向けて

11 月 14 日より 6 週間にわたって行われた 3 年次 PBL ユニット 3: 消化器では、ユニットチェア:藤本一眞教授の支援のもと、チューターの介入方法に関するトライアルを行いました。それは、チューターに消化器の専門的能力(知識、技能、経験)を持つ教官を多くそろえ、積極的なテュートリアルへの介入を試みたことです。そしてユニット試験(12 月

26 日)終了後に、学生にアンケートを実施しました。

その結果、72%の学生がチューターの介入に積極性を感じ、81%の学生がチューターの専門的能力がテュートリアルを活性化させたと感じていました。積極的な介入によって生じた問題については、「無い」(40%)、「チューターが小講義をした」(24%)、「時間が余計にかかった」(18%)、「批判的な言動をした」(13%)、「強く議論を誘導した」(7%)でした。そして、80%の学生が、今後も積極的な介入を希望し、90%がチューターは領域の専門的能力を持つべきだと回答しました。チューターの担当方法については、「現状どおり 1 ケースごとに交代」(80%)、「ユニット期間中固定」(13%)であり、その理由としては「チューターによって教育の熱意、技量に差がありすぎるから」という意見が大半を占めました。

PBL チューターの役割は「教えるのではなく学生主導の学習を促進する」ことですが、「学生主導」が強調されるあまり、「介入すべきではない」という誤解、あるいはチューターは「何もなくてよい」「誰でもできる」という曲解が生じているように見受けられます。しかし、学生の議論や学習を促進するには、チューターが、講義を通して教えるのとまた別の難しさを持った教育技術と、担当ユニットに関する専門的能力(あるいは十分な事前の準備)を持つことが必要です。専門チューターを毎回集めることは、人的・時間的資源からみて困難ですが、内容についての事前準備や、優れた教育(tutoring)技術を共有することは可能です。

ユニット 4: 血液・代謝・内分泌においても、ユニットチェア:末岡榮三朗助教授の協力を得て、チューターには積極的な介入をお願いするとともに、効果的な介入方法の共有を図っています。

このほか、PBL を効果的にするために不可欠な、PBL と並行した臨床実習/技能訓練、PBL 中での効果的な講義のあり方についても、調査・検討を進めていきたいと思えます。

(H19-20 年度 Phase チェアパーソン:小田康友)

## 教育広報部会

小田康友、池田豊子、市場正良、吉田和代、江村正、藤田君支、田崎法人  
ご意見をお待ちしています ([oday@cc.saga-u.ac.jp](mailto:oday@cc.saga-u.ac.jp))